

令和 2 年 5 月 7 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02206

研究課題名(和文) 礼学形成期における変礼についての基礎的研究

研究課題名(英文) A study on the theory of "bianli" (rituals in the exceptional situation) in ancient China

研究代表者

末永 高康 (Suenaga, Takayasu)

広島大学・文学研究科・教授

研究者番号：30305106

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：「変礼」とは礼が直接に規定していない状況下における対処法である。現実におけるすべての状況を覆う形であらかじめ礼を規定することはできず、この「変礼」の議論を通じて礼の規定はより完備されたものとなっていく。

本研究は『儀礼』の「経」「記」や『礼記』の檀弓篇、曾子問篇を主たる対象とし、これらの資料に見える「変礼」の議論の分析を通じて、先秦時代における礼についての学問のあり方の変遷の諸相を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『儀礼』の各篇や『礼記』中の礼の「記」(注釈)としての諸篇に対する思想史的研究は従来ほとんど行われてこなかった。旧来の礼学においては、諸経から帰納的に礼の体系を復元することに主眼が置かれ、礼の記述が完備化されていく過程の所産として礼経の諸篇を歴史的に見る視点が欠落していたからである。本研究は「変礼」を切り口とすることによって、礼経の記述の完備化の過程を明らかにし、これらの諸篇を思想史研究の俎上に載せることを可能にした。ここに本研究の学術的意義がある。

研究成果の概要(英文)："Bianli" is rituals to be taken under the situation that the ritual does not prescribe directly. The ritual cannot prescribe rituals in a form to cover all situation in the reality beforehand. Through a discussion of "bianli", the description of the ritual becomes more completely.

The main object of this study is the Yili and the Liji (especially Tangong and Zengziwen). Through the analysis of the discussion of "bianli" in these documents, this study clarified the several aspects of the change of the theory about the rituals in the pre-Qin period.

研究分野：中国思想史

キーワード：変礼 『礼記』 檀弓篇 曾子問篇 『儀礼』

1. 研究開始当初の背景

前世紀末の郭店楚簡や上博楚簡の出現により、両戴記(『礼記』と『大戴礼記』)中の『曾子』や『子思子』に関する諸篇を中心とした部分については、その再検討がこれまでに精力的に進められ、その知見に基づいた新たな先秦儒家思想史が構成されつつある。それに対して、両戴記の核である、礼経の「記」(注釈)としての諸篇については、直接に対応する文献の出土例をいまだ見ないこともあり、その研究はあまり進んでいない。これらの諸篇に対しても、新出土資料の知見に基づいた新たな検討が行われなければならないこと、その作業の上に立って新たな先秦礼学史が構想されていかなければならないこと、この必要性は広く認識されているものの、このような研究はほとんど手つかずの状態にあった。

そこで、報告者は「礼学形成史資料としての両戴記の基礎的研究」(基盤研究(C)平成26年~28年)において、まずは両戴記中の礼の「義」(意義)を説く諸篇についての再検討に着手した。その過程で『儀礼』の「記」についての分析を行う必要に迫られ、その分析を通じて、先秦礼学史の研究において「変礼」の記述に対する分析が不可欠であるとの認識に至ることになった。

2. 研究の目的

ここで言う「変礼」とは「経礼」に対する概念である。礼としての規定が確立している「経礼」に対して、その規定が及ばない状況下における礼が「変礼」である。現実には起こり得るすべての場合を覆いつくす形であらかじめ礼を規定しておくことは不可能であるから、「経礼」の想定から逸脱する状況下における「変礼」の議論は常に生じてくる。実際、この議論は『儀礼』の「経」の記述の段階においてすでに生じており、先行する礼文献の記述において覆いつくされていない場合に対する「変礼」の議論が、後に成立する文献において次第に付け加えられていくことになる。

礼文献に残されたこのような「変礼」の議論を丹念に分析していくならば、関連する礼文献の相互の関係(成立年代の相対的先後を含む)や、礼に関する議論の展開の過程、さらにはその背後にある礼思想の変遷について多くの情報を得ることが期待されよう。両戴記を中心とする礼文献に見える「変礼」の議論を切り口として、礼学形成期における諸儒の思想的活動の諸相を明らかにすることを通じて、先秦礼学史研究の一翼を担うのが本研究の目的である。

3. 研究の方法

「変礼」に関する議論は、礼文献中に散在しているが、比較的まとまった形で「変礼」についての言及があるのは、『儀礼』の「経」「記」、『礼記』の檀弓篇と曾子問篇であり、これらの文献が本研究の主たる対象となる。これらの文献の精密な読解が本研究の基礎であり、その読解においては、鄭玄注や『五経正義』といった伝統的な注釈や、清朝考証学以来の訓詁学や礼学上の成果を踏まえるとともに、近年の新出土資料の知見も活用されることになる。

以下、それぞれの文献に即した研究の方法について略述する。

(1) 『儀礼』については、まず、この文献の記述全体を「経礼」と見る立場から自由にならなくてはならない。今本『儀礼』の各篇は多く経・記に区分されているが、その区分はこの文献の成り立ちに即した合理的なものではない。この区分を放棄して、田中利明「儀礼の「記」の問題」(『日本中国学会報』19、1967年)に従い、各篇の冒頭部から始終一貫した儀式の次第を記した部分を「経」、それ以外の部分を「記」と新たに区分すると、「記」の一部に「経」の想定から逸脱した状況下における「変礼」の記述が見えることがわかる。のみならず、「経」の内部においても、「若し・・・ならば、則ち・・・」の形を取って、標準的な状況から外れた場合の対処としての礼の分岐がしばしば記されている。さらに、ある篇では礼の分岐として「経」に組み込まれて記述されているものが、他の篇では「記」の方に記載されている場合もある。このような『儀礼』各篇における礼の分岐や「変礼」の記述を比較検討することにより、『儀礼』の各「経」「記」の相互の関係を明らかにすることができる。これを明らかにするとともに、『儀礼』各篇の編纂段階における礼記述のあり方や、その背後にある礼思想について検討を加えていく。

(2) 『礼記』檀弓篇は、喪礼に関するさまざまなエピソードを蒐集する一篇であるが、本来礼の「記」に過ぎなかった『礼記』が經典化されるとともに、後世、この篇の記述において示された礼もまた「経礼」としてとらえられていくことになる。しかし、典型的な礼の遂行の場面であれば、それは常識的なものとして処理されて、そもそもトピックとして取り上げられることはない。この篇に収められたエピソードも、その多くは非典型的な礼の場面や、適礼との境界線が見定めがたい非礼に関するものとなっている。この篇が編まれた段階では、そこに示された礼は明確に「経礼」として意識されたものではなく、むしろ「変礼」に近い性格のものであったはずである。すでに固定化された礼を前提としたエピソードの記録としてではなく、礼の規定が新たに生成されていく場面の記述として、この篇のエピソードをとらえなおしていくことにより、これらのエピソードが形成され記録されていった段階の礼に対する思考や思想の諸相を明らかにしていくことができる。これを明らかにしながら、初期礼学の展開の一端をより具体的に描き出していくことを試みる。

(3) 『礼記』曾子問篇は、「変礼」についての議論を中心として構成された特異な一篇である。本篇の記述は、孤立したものが多いが、多く『儀礼』と関連し、『礼記』の他篇や漢代の文献との重複も見られる。特に『白虎通』の「変礼」の議論においては、その論拠としてよく引用されており、この篇の佚文と考えられるものも見えている。この佚文の存在は、今本の曾子問篇が旧来の姿を失っていることを示唆しており、本篇の分析に先立ち、その資料的性格についての検討が必要であることを示している。そこで、まず今本曾子問篇の資料的性格を吟味し、可能な限りその旧来の姿の復元を目指す。その上で『儀礼』や他の文献の礼記述との同異に着目して、この篇とそれらの文献との相互の関係を明らかにするとともに、礼学形成期における「変礼」の議論の変遷を可能な限り追いかけていくことにする。

4. 研究成果

まず本研究における注釈学的成果を挙げておく。本研究の基礎作業として『礼記正義』の檀弓篇、曾子問篇に対する訳注作業を行い、その内、曾子問篇の約半分についての訳注を『東洋古典学研究』上に掲載した。これは、曾子問篇本文のみならず、漢代の鄭玄注、唐代の孔穎達正義をも対象に含めた詳細な訳注であり、経学史(礼学史を含む)研究の基礎資料として高い学術的価値を有するものである。

以下、上の方法欄と対応させる形で、本研究における個別の成果を記していく。

(1) 『儀礼』の「経」「記」における礼の儀節の分岐や「変礼」の記述に関する成果は、論文「『儀礼』における礼の儀節の分岐について」として発表した。

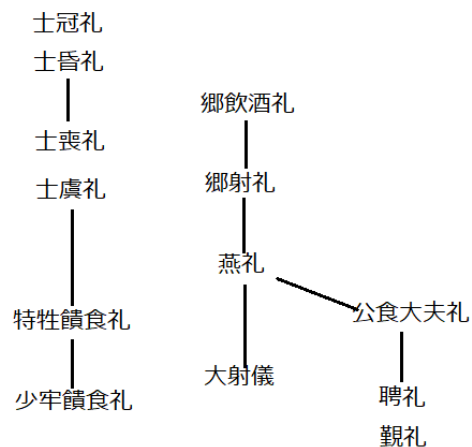
方法欄に記した田中利明氏の「経」「記」の区分により、報告者は拙稿「『儀礼』の「記」をめぐり一考察」(『東洋古典学研究』39、2015年)において、『儀礼』の各「経」の相対的な成立の前後のあらましを明らかにしていたが、本研究を通じて、それをさらに精密化することができた。その結果を図示したものをここに示しておく(直線で結ばれたものは上が古く、下が新しい)。

この図の最上部に位置し、『儀礼』の古層に属すると考えられる士冠礼・士昏礼「経」においては、礼の儀節の分岐もまたほとんど記されておらず、これらの「経」の作者が各礼の「儀礼の典型を記すこと」に集中しており、儀節の分岐にまで目配りする余裕がなかったことを示している。

これが郷飲酒礼「経」になると、プレイヤーの付加による礼の儀節の分岐が記されるようになる。その記述と、郷射礼の記述を比較することにより、郷射礼「経」は大夫が参加することを前提としてその射礼に関する部分が構成され、後にその飲酒礼に関する部分が郷飲酒礼「経」を利用して補われたことを示すことができた。これは郷射礼「経」の成立過程に関する大きな発見である。

以後に成立した諸「経」では、さらに多くの儀節の分岐が書き込まれていくようになるが、礼の典型を記すという点に変化はなく、当該の礼における主要なプレイヤーが不在となって礼の儀節を大きく変えてしまうような場合は、最後まで「経」に組み込まれることはなかった。そして各「経」が成立した後は、それぞれの「経」が内部に組み込むことのできなかった礼の儀節の分岐が、それぞれの「記」によって補われることになるが、それもプレイヤーの付加・不在・変更を中心とした、人・物・所・時を変数とする礼の儀節の分岐が大半であり、不測の事態によって余儀なくされる儀節の分岐については聘礼「記」に例外的に記されるに過ぎない。『儀礼』における「変礼」の記述はこの段階にとどまっておらず、より多岐にわたる「変礼」の記述や議論は、『礼記』の奔喪篇のような逸礼や、曾子問篇等の諸篇に受け継がれていることを論証した。

また、その論証の過程において、今本少牢饋食礼「記」が身分の違いによる礼の分岐を示したのではなく、特性饋食礼に類似した形で構成された少牢饋食礼のプロト「経」が残されているものであることを示すことができた。これもまた『儀礼』テキストの成立過程に関する貴重な発見の一つである。



(2) 『礼記』檀弓篇の分析に関する成果は、論文「初期礼学資料としての『礼記』檀弓篇」として発表した。

方法欄に記したように、檀弓篇のエピソードを、礼の規定が新たに生成されていく場面の記述としてとらえなおしていくことにより、ある礼がどのような過程を経て完備化されていくのかをある程度追究することができる。上記の論文では、檀弓篇に比較的多くのエピソードが残されている弔礼について、その追求を行い、士の喪礼については、ほぼ以下のような過程を経て完備化されていったことを明らかにすることができた。

すなわち、喪服で弔することは禁じられていたものの吉服の上にならば喪章としての「𦘒」(𦘒は糸偏に至旁)を付ければよいとされていただけの段階から、「玄冠」を改めて「素冠」を付け

なければならないとされる段階を経て、さらに喪主の変服に合わせて甲服も変ずるべきであるとする段階へと、士の喪礼は変化していく。

このこと自体は個別の礼の変化に対するトリビアルな発見に過ぎないが、この成果の意義は、従来の礼学研究のあり方を解体し、初期礼学の形成過程を思想史的に明らかにする手法を実例を以て示した点にある。鄭玄以来の礼学の主流は、檀弓篇を含む礼文献全体の記述から礼の体系を帰納的に導くものであったが、そこでは個々の礼の完備化の過程が捨象されることになる。

「変礼」に関する議論等を通じて個々の礼は次第に完備化されていくのであり、その過程の痕跡を礼文献に求めることにより、その完備化の過程の姿を描き出し、そこに礼思想の展開を読み取ることができる。このような研究が可能であることを、抽象的にではなく、具体例を通じて示した点に本成果の意義があると言えるであろう。

(3) 『礼記』曾子問篇に関する成果は、論文「『礼記』曾子問篇初探」として発表した。

方法欄に記した今本曾子問篇の資料的な問題については、『白虎通』の引用を援用しつつ、この篇の構成について分析を加え、これまでに指摘されてこなかった錯簡の存在 「曾子問曰、當祭而日食」から「如牲至未殺、則廢」に至る一簡分33字と、「天子崩、未殯、五祀之祭不行」から「奉帥天子」に至る三簡分101字との錯簡 を明らかにして、今本の錯誤を訂正するとともに、もともとの曾子問篇には、「曾子問曰」と「孔子曰」をともに欠く節が無かったことを示し、曾子の問いを欠く節については、それが他の問答との関係で付加されたものであることを明らかにした。

また、問答の形を取る節については、『礼記』雜記篇等の重複文の検討を通じて、それが他資料からの編集によるものではなく、他資料に取材しつつも、この篇の作者によって創作されたものであることを示すとともに、この篇が現実における礼の履行上の問題を解決しようとして作られたものではなく、二つの礼が交錯する場合について理論的に考察しようとしたものであることを明らかにした。

さらに、『儀礼』の礼記述との対比から、この篇の作者が、『儀礼』の作者集団やその忠実な継承者でないことを明らかにするとともに、この篇が『礼記』奔喪篇に遅れ、雜記篇に先立つものであることを示した。このことは、この篇の成立が先秦時代に遡る可能性が高いことを示すものであり、先秦礼学史の資料として本篇を活用する道を開くものである。

以上の成果は、「変礼」を切り口にして初期礼学の展開を思想史的に描き出すことを可能としたものであり、先秦礼学史を研究する上での基礎を固めるものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 末永高康	4. 巻 49
2. 論文標題 『礼記』曾子問篇初探	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 末永高康	4. 巻 49
2. 論文標題 礼記注疏訳注稿（十二） 曾子問第七（六）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 末永高康	4. 巻 48
2. 論文標題 礼記注疏訳注稿（十一） 曾子問第七（五）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 45-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 末永高康	4. 巻 47
2. 論文標題 初期礼学資料としての『礼記』檀弓篇	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 95-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 末永高康	4. 巻 46
2. 論文標題 礼記注疏訳注稿(九) 曾子問第七(三)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 77-101
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 末永高康	4. 巻 47
2. 論文標題 礼記注疏訳注稿(十) 曾子問第七(四)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 111-133
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 末永高康	4. 巻 70
2. 論文標題 『儀礼』における礼の儀節の分岐について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本中国学会報	6. 最初と最後の頁 3-16
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 末永高康	4. 巻 44
2. 論文標題 礼記注疏訳注稿(七) 曾子問第七(一)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 69-102
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 末永高康	4. 巻 45
2. 論文標題 礼記注疏訳注稿(八) 曾子問第七(二)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 75-98
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 0件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 末永高康
2. 発表標題 《儀礼》本文分析的基点 重新評価田中利明《儀礼中“記”の問題》
3. 学会等名 経学与政治国際学術研討会(国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----